

コリント人への手紙6章 「心を広くしてください」

1A 神と共に働く者として 1-10

1B 恵みは無駄に受けない 1-2

2B つまずきを与えない 3-10

2A コリント人の父として 11-18

1B 窮屈にしている心 11-13

2B 世から離れる 14-18

本文

私たちが、コリントにある教会へのパウロの手紙を読んで、初代教会もまた現代の私たちも同じ人間であったことがお分かりになったと思います。私たちはイエス様を信じて教会に集い始めると、そこが荒波のようなこの世から自分を守る、避難所であってほしいと願います。世における思い煩いに疲れてそれで教会に来たのだから、問題なしの状態を願っています。けれども、実は教会が社会の縮図のようになっていて、世の問題が教会の中にもあることに気づきます。

他の教会と異なるコリントの教会の特徴は、彼が長いことそこに滞在して、彼らに教えていたということです。一年半にて、神の御言葉を丹念に教えました。だから彼らは知識において、とても豊かな人々にされました。彼は、そのクリスチャンに出来る限りの愛情を注ぎました。その教会をとっても愛していたのです。

ところが、私たち人間は不思議な生き物です。パウロのような、忠実な僕の働きによって神の恵みを彼らは受けていたのですが、その恵みを受ければ受けるほど、その働きへの感謝がなくなります。ちょうどお母さんが作った栄養たっぷりの、真心のこもった食事を食べ続けた子どもが、かえってそのおいしいご飯が気に入らなくなって、外に出てマクドナルドのような不健康な食べ物、ジャンクフードを食べたくなります。そのようなことがコリントの教会に起こったのです。パウロの働きだけに満足ができず、それで自分の正しいと思うこと、自分なりのやり方でやり始めたのです。けれども、彼らは未熟でした。パウロの教えた福音の真理を、具体的な生活の中でどのように当てはめればよいか分かりませんでした。それでこれまでの自分のやり方、その世の知恵を教会の中にそのまま持ち込んでいたのです。

そうしているうちに、教会に霊的なジャンクフードを持ち込んでくる教師たちがやってきました。彼らの教えていることは、これまでに聞いたことのない新鮮で、新しいものでした。けれども、パウロの教えていた、とても単純な、恵みの福音とは正反対のものでした。コリントにいる教会の人々は、こうした偽教師の影響を受けていったのです。そして彼らは、パウロの働きを批判し、批評し、見下すようになっていきました。ある人々は信頼を深く寄せていますが、またある人々は完全にパウロを否定していました。程度の差こそあれ、それら偽教師のためにパウロへの信頼が引き落とされていったの

です。

少しパウロの立場になって考えてみましょう。パウロがどんなに、神の御言葉を彼らに伝えようとしても、彼らがパウロに信頼を置いていないのですから、その教えは伝わりません。したがって、神の真理を教えるために、初めに信頼関係を取り戻さなければいけません。そこでコリント人への手紙第二には、「推薦」という言葉が何度も出てきます。それは、コリントのクリスチャンに対するパウロの履歴書でありました。それは紙面によるものではなく、彼の教会奉仕者としての生活そのものが、彼らへの推薦状でした。そこでこの手紙には、自分の務めについて詳しく説明し、それから彼らに自分の心を開いてほしいと嘆願しています。

1A 神と共に働く者として 1-10

1B 恵みを無駄に受けない 1-2

6:1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに懇願します。神の恵みをむだに受けないようにしてください。6:2 神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

パウロは、自分のことを「神とともに働く者」として紹介しています。神と共に働く、ということは、とても素晴らしい事ですね。私たちは恵みによって、信仰によって救われたのですが、神はその恵みによって続けて私たちの内に働いてくださいます。そして、奉仕の働きの中で神の恵みの賜物が注がれて、私たちはその恵みに浴することができます。

パウロは、とてつもなく数多くの働きを行いました。それは神の恵みによって支えられていました。「私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜなら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。(1コリント 15:9-10)」自分が神の教会を迫害するということでもない罪人であり、使徒と呼ばれる資格のない者であり、使徒たちの中で最も小さい者であると言っています。けれども、神は恵みによって彼を使徒としてくださいました。その恵みによって、他の使徒よりも多くの働きをしたのです。

ですから、私たちがいつも教会での働きで心に留めていなければいけないことは、「神の恵みによる奉仕」です。「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。(ローマ 12:3)」神の恵みによって奉仕を行います。その信仰の量りに応じて奉仕を行います。ですから、神の恵みとその奉仕の働きの中で明らかにされるのです。

では、「神の恵みをむだに受けないようにしてください。」というのはどういうことでしょうか？これは、

神の恵みとそのそばらしさを受けたにも関わらず、自分自身で恵みの働きを受け入れず、締め出してしまふことを言います。コリントにいる人々は、パウロの奉仕の働きによって、神の恵みが注がれていきました。ところが、パウロへの信頼と尊敬がなくなっていきました。それはパウロを拒否しただけでなく、パウロと共に働かれた神ご自身の恵みを拒んだのです。その拒みによって、受けられていた神の恵みをみすみすみ見逃したのです。

彼らがどのようにして、恵みは無駄にしてしまったか、その経緯を眺めてみたいと思います。私たちが仲間割れについてコリント第一で学びましたね。彼らは、教会全体を眺めて、神の教会に働かれる御霊に注目することなく、その働き人に注目していきました。そしてパウロのことを批評していました。「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるのではありません。私をさばく方は主です。(1コリント 4:3-4)」

そして教会で多くの問題が起こりましたね。パウロは、かなり語調を強くしてその問題に対応しました。「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのこと。それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行ないをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行ないをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主イエスの日に救われるためです。(1コリント 5:1-5)」これだけ読むと、きつすぎると感じるかもしれません。そしてパウロは、その男のことを嫌っている、憎んでいると思ったのでしょう。

けれどもパウロの心はその正反対でした。「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。もしある人が悲しみのもとになったとすれば、その人は、私を悲しませたというよりも、ある程度——というのは言い過ぎにならないためですが——あなたがた全部を悲しませたのです。(2コリント 2:4-5)」彼は、涙ながらに書いていたのです。このことによって、男は悔い改めました。これは良かったのです。

ところが、全員ではないですが、一部の者たちはパウロへの評価がさらに辛辣になってきました。「私は手紙でああなたがたをおどしているかのように見られたくありません。彼らは言います。『パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ったばあいの彼は弱々しく、その話しぶりはなっていない。(2コリント 10:10)」

もしパウロが部外者で、コリントの教会に対して横柄な、強権的な意見を述べているのであれば、

まだその反発は理解できません。しかしパウロこそが、コリントの教会をゼロから開拓した人物であり、一年半腰を据えて教えていたのです。他の信者は、「パウロは、訪ねてくる他の教師たちとは違い、問題が多い。」と批評していたのですが、パウロはこう諭します。「たといあなたがたに、キリストにある養育係が一万あろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。(1コリント 4:15)」

パウロは、彼らにとって霊的には最も近い身内だったのです。けれども、彼らはあたかも、あまり深く知らない人であるかのようによそよそしく接していました。彼を慕って、彼を愛して、尊敬して、そのまま子供のようにパウロから指導を仰げばよかったのに、心を閉ざしていたのです。このような時に、自分の霊的成長が阻まれます。恵みを無駄にしていきます。そして自らを霊的な敵からの攻撃に脆くしてしまうのです。巡回教師が教会に来ていました。アポロのように優れた教師もいましたが、悪い教師も来て、パウロの信頼を引き落とし、パウロから彼らを引き離そうとしました。

この偽教師をパウロはコリント第二の手紙 10 章から最後までで取り扱っています。「しかし、私は、今していることを今後も、し続けるつもりです。それは、私たちと同じように誇る場所があるとみなされる機会をねらっている者たちから、その機会を断ち切ってしまうためです。こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。(2コリント 11:12-13)」そして、パウロを引き落としながら自分たちの地位を教会の中で確保しようとしていた者たちは、こんなことまで行っていたのです。「事実、あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、だまされても、いばられても、顔をたたかれても、こらえているではありませんか。(2コリント 11:20)」これは、まさに社会的にも問題になっているカルト化された教会です。パウロのことを、強すぎる、自分たちを支配していると言って自分たちから引き離そうとした結果、かえって自分を虐げる指導者の下に陥ったのです。

そしてパウロは最後に、一部の悔い改めていない者に強く臨んでいます。「私の恐れていることがあります。私が行ってみると、あなたがたは私の期待しているような者でなく、私もあなたがたの期待しているような者でないことになるのではないのでしょうか。また、争い、ねたみ、憤り、党派心、そしり、陰口、高ぶり、騒動があるのではないのでしょうか。私がもう一度行くとき、またも私の神が、あなたがたの面前で、私をはずかしめることはないのでしょうか。そして私は、前から罪を犯して、その行なった汚れと不品行と好色を悔い改めない多くの人たちのために、嘆くようなことにはならないのでしょうか。(12:21-22)」「そういうわけで、離れていてこれらのことを書いているのは、私が行ったとき、主が私に授けてくださった権威を用いて、きびしい処置をとることのないようにするためです。この権威が与えられたのは築き上げるためであって、倒すためではないのです。(13:10)」

2B つまずきを与えない 3-10

6:3 私たちは、この務めがそしられないために、どんなことにも人につまずきを与えないようにと、
6:4a あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しているのです。

コリントの人々はパウロをそしっていました。けれども、それは事実に基づくものではなく、偏った見方でした。これらの誤った非難については、パウロはやっていないものを正すことはできませんから、どうすることもできませんでした。同じように主に仕えるとは、人からいつも喜ばれることではないことを知る必要があります。必ず、その働きを受け入れない、嫌がる人々が出てきます。時に、建設的な批判もあるでしょう。そして、それには耳を傾けなければいけません。けれども、往々にして、どんなに改善しようと努力しても、何をしても非難をする人は非難します。人を喜ばすことはとても難しいのです。けれども、神を喜ばすことは難しくありません。神を信じ、神に対して心を尽くして仕えるなら、神はその心を見ておられ、忠実とみなしてください。

パウロは、十字架の言葉が、どんなことをしても人々をつまづかせることは知っていました(1コリント 1:23)。むしろ、キリストのことばに混ぜ物をしないように気をつけていたのです(2コリント 4:2)。

けれども、正当にそしりを受けるべき事柄があります。金銭はその一つでしょう。パウロは7章2節で、自分が不正をしたことがない、利を貪ったことがないと言っています。道徳もそうでしょう。そして信仰の弱い兄弟のことを心に留めて、自分の持っている自由を制限することも愛のゆえに行います。パウロはこれらのことを、神の働きを自分で妨げることをないように避けていました。

6:4a すなわち非常な忍耐と、悩みと、苦しみと、嘆きの中で、6:5 また、むち打たれるときにも、入獄にも、暴動にも、労役にも、徹夜にも、断食にも、6:6 また、純潔と知識と、寛容と親切と、聖霊と偽りのない愛と、6:7 真理のことばと神の力とにより、また、左右の手に持っている義の武器により、

キリスト者の成熟は、何によって量られるのでしょうか？それは、自分のことを考えないようになり、他者のことをもっと考えるようになることです。パウロは、先に「自分を神のしもべとして推薦している」と言いましたが、しもべは自分のことを喜ばせません。キリストにあって成熟すれば、他者への愛のゆえに、自分を楽ませるものを横に置くことができるようになります。他者のために労苦するところに、自分の愛が現れます。これらのことをしている時に、キリストの喜びにあずかっているのです。

したがって、4節後半から5節に書いてある困難な状況にあっても、それでも6-7節に書いてあるキリストのご性質をもって対処することができるようになります。「私は、自分の信仰を保っていることで精いっぱいだ。こんな困難なことが起こっていたら、教会の働きなどとてもない。」ではありません。そうではなく、そのような困難が来ても「キリストにあって、これらのことが賜物として与えられている。主が共におられるから。」と耐え忍び、喜ぶことができます。自分の関心は自分自身ではなく、他者をキリストの愛で愛することにあるからです。

6:8 また、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたり、好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。私たちは人をだます者のように見えても、真実であり、6:9 人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであっても、殺されず、6:10 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持た

ないようでも、すべてのものを持っています。

パウロは、正反対の評価を並べながら自分を推薦しています。彼の働きや彼の言っていることは全く同じなのに、そのまったく同じことを聞いている人々の中に、対立する評価があったのです。世の影響をもってパウロを見ている人は、パウロの悪評を信じました。パウロは人をだましていたと言いました。パウロが何をしているのか分からない、と言っていました。彼が貧しく、何も持っていないではないか、と言っていました。けれども、御霊によってパウロを見ていた人は正反対でした。彼をほめていました。彼の良い知らせを信じていました。パウロは真実であると見ていました。パウロに働く、復活の力を認めていました。パウロがいつも喜んでいることを知っていました。そしてパウロがすべてのものを持っていると知っていたのです。

2A コリント人の父として 11-18

そしてパウロは、今度は自分を神とともに働く者としてではなく、信仰による父として彼らに語りかけます。

1B 窮屈にしている心 11-13

6:11 コリントの人たち。私たちはあなたがたに包み隠すことなく話しました。私たちの心は広く開かれています。6:12 あなたがたは、私たちの中で制約を受けているのではなく、自分の心で自分を窮屈にしているのです。6:13 私は自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください。

ここがコリント人への手紙を学んできた中でのテーマとなるでしょう。パウロは、自ら心を開いてコリントの人たちに伝えようとしていました。コリントの人たちは、自分がパウロから受けた仕打ちがある、自分が被害者だと思い込んでいました。問題はパウロに彼らへの愛が欠如していたのではなく、パウロに対して心を窮屈にしていたのです。それで、パウロに心を開いて話そうともしませんでした。

これは、家族関係と似ています。父は自分の子を愛してやまず、この子のためなら何でもしたいと願っています。けれども、本人は父に心を開きません、なぜならお父さんは自分に酷いことをしている、と思っているからです。父は、愛を示すために最善のことをしているのに、それでも心を開こうとしません。このような心のすれ違い、言葉のすれ違いが、教会の中でもしばしば起こります。キリストにあって互いに愛しているはずなのに、この世的な考えが入り込むと、開かれた、心と心の通う意思疎通に支障が出てきます。

正直であること、心をそのまま明らかにすることは、キリスト者にとって大切な性質です。自分自身について正直であることによって、真実のある関係を互いに持つことができます。パウロは6節で、「偽りのない愛」と言いました。私たちは、クリスチャンぽくふるまうことができます。親切にすることはできますが、自分の恐れている人、自分の嫌いな人に近づくことを恐れて、話しかけるのをやめてしまったり、距離を取ったりします。こうしたことでは、和解することは不可能です。私たちは、クリスチャンと

いう仮面を取って、主との関係において正直になり、透明にならなければいけません。

2B 世から離れる 14-18

教会で起こる問題は、横の人間関係であるようで、実は縦の神との関係に起因しています。主との関係がないがしろにされているので、それが他者との関係に影響を与えるのです。次は、なぜコリントのクリスチャンたちが、パウロに心を開けなかったかを良く教えています。

6:14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。6:15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。

コリントの人たちの問題は、パウロを愛していなかったことではありません。彼らは心の片隅では、パウロのことが好きだったのです。パウロを愛していたのです。けれども彼らの問題は、この世も愛していたことです。不信者の人たちとも仲良くやっていきたくったのです。信者も不信者も同じように愛したいという、間違った博愛主義を持っていたのです。

神による信者への愛と、そして不信者への愛はその性質が異なります。神はこの世を実に愛し、独り子を与えてくださいました。神はキリストを死に渡されるほど、不信者を愛しておられます。けれども、キリストを信じる者は、御霊によって、神の家族の中に養子縁組されたのです。キリストが長子となり、私たちは神に愛される子どもとされました。したがって、信者を愛するだけでなく、この世のものを愛することは、まるで自分の子と同じように、他人の子を愛しているようなものです。まず自分の子に愛を注がなければいけません。同じように他の人たちを愛することは不可能です。子が愛されるからこそ、他の人々も愛を分かち合うことができます。

このように相容れない不信者と信者のくびきを自分自身に負わせていたことが、彼らの問題でした。この世と歩調を合わせることによって、パウロへの愛、他の信仰の兄弟たちへの愛がなおざりにされてきました。教会で指導している者に対しては尊敬によって、その人を愛します。「兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。(1テサロニケ 5:12-13)」愛をもって深い尊敬を払うことによって、自分も大きな益になり、教会全体に平和と秩序がもたらされます。自分がむきになって、指導者に対抗しようとするときに、自分から失われているのは神の愛です。真実な信者の交わりも失います。

6:16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。6:17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、6:18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

私たちは、人のことを指さす前に、自分の内からこの世を切り取らなければいけません。分離させる必要があります。私たちは、神の宮なのです。御霊が私たちのうちに住まわれているのです。心が清められなければいけません。怒りを持っていますか？自分は分かっている、自分はできるというぬぼれは持っていないですか？まるで上司の悪口を職場で話しているように、指導者や他の兄弟姉妹の悪口を言っていないですか？都合の悪いことを話さない、偽ってはいませんか？心に情欲はありませんか？ねたみや争いの心は持っていないですか？こうしたことを、主によって清めていただかなければいけません。御霊の働きを受け入れましょう。そして、神の恵みを無駄にしないようにしましょう。